

2013

12

Vol.9 No.12 2013



Journal of Industry-Academia-Government Collaboration

産学官連携ジャーナル

<http://sangakukan.jp/journal/>

特集 1

女性の参画 次の100年へ

- 女子学生入学 100 周年 時代を切り開く行動指針
- 日本初の女子学生誕生
- 女性が活躍するリサーチ・アドミニストレーター推進組織
- 女性気象予報士による母親向けお天気教室「さいえんすママカフェ」
- JST「さきがけ」事業での女性研究者支援

特集 2

平成 25 年度 イノベーションコーディネータ表彰

- Xバンドマルチパラメータレーダによる「ゲリラ豪雨」の観測
- 国際集積エレクトロニクス研究開発センターの始動
—学を介した多対多型産学の共創場の構築—



独立行政法人
科学技術振興機構
Japan Science and Technology Agency

■大学発ベンチャーと地方の ベンチャー企業の連携



辻 政和
つじ まさかず

CROSSEED 株式会社 代表取締役

2008年7月、待望の“ダチョウ抗体マスク”が世に出る時が来た。新型インフルエンザ対策の機運が高まっていた時だった。抗体をつくりだすことから精製までを担う京都府立大学発ベンチャーのオーストリッチファーマ（京都府）と、ベンチャー企業のマスクメーカーCROSSEED（福岡県）の2社が、マスク6,000万枚を生産し生活者に送り届けることができた。

このコア技術を発明した京都府立大学生命環境科学研究科の塚本康浩教授は大学で獣医師として家禽（かきん）を研究。ダチョウの生体に深く興味を抱かれてダチョウ卵黄抗体の開発に成功された。この研究を支えたのが科学技術振興機構（JST）の「独創的シーズ展開事業・大学発ベンチャー創出推進プロジェクト」事業だった。

私は23年間、化学品商社の営業企画部門で東京、大阪を走り回った後、出身地の福岡県に戻り、2003年にCROSSEEDを設立した。当時、マスクの国内生産は空洞化していた。マスクの国産は無謀だと言われたが、ダイキン工業、資生堂との研究契約を基に2005年工場設立に踏み切った。

塚本先生との出会いは2006年。『ダチョウ抗体の研究成果は面白い。実用化の期待も大きそうだ』との情報を得たのがきっかけだ。直ちに塚本先生を訪ね、意気投合して即座に産学連携による“ダチョウ抗体マスク”の開発がスタートした。「マスク」と「ダチョウ」の組み合わせによるイノベーションを夢見たわけだ。

当時の家庭用マスク市場は年間50億円で、そのうち高機能プレミアム領域は5%に満たない時だったが、塚本先生と私は『エビデンスのある本物のマスクを作りたい』という高いゴールを目指した。鳥インフルエンザの人感染例が最も多いインドネシアにおいて、塚本研究室とボゴール農科大学が合同で、飛沫（ひまつ）感染実験による実質的な検証まで進めた。若き研究者たちの果敢なる挑戦に脱帽した。

私ひとりで営業していた初期、さまざまな企業に提案を重ね、資生堂、セコム、出光興産との販売戦略の共有が実現した。ダチョウ抗体マスクの開発とビジネスの成功は、大学の独創的研究とエビデンスの構築、そして推進企業の信用力がそろったことによると考えている。

東日本大震災の発生から3日後、セコムは危機管理用として備蓄していた抗体マスク500万枚（6億円相当）を被災地に贈った。後日、塚本教授には『石巻地区の被災者はみんなダチョウのマークの付いたマスクをしていた』との情報が入ったそう。こうした企業と連携できたことを誇りに思っている。今後も、人類を守る商品として広く役に立つよう、さらなる技術開発と販売提案に精進して参りたい。